

連載企画 私の職場の「協同労働」

協同のひろば

# 「お互いさん」と言える関係を

～センター事業団 京都事業所の実践から～

矢吹美樹（センター事業団）

今年4月1日、京都内でははじめての病院清掃現場「京都第2中央病院」の清掃業務が始まった。人手の足りない清掃業務に、同じ事業所の京都生協食堂現場の組合員と地域福祉の現場「ほんわか」のヘルパーが応援に入った。5月には、「ほんわか」サロンの利用者が縫ってくれた数十枚もの雑巾が清掃現場に届けられた。川口事業所から異動してきた事務局員の千原崇史さんからは、「協同労働」を実感するという日報がたびたび届いていた。京都での「協同労働」の実際の姿を知りたいと京都事業所に出かけた。

（矢吹）

## 撤退、そして、仕事おこしの中から

京都事業所は、京都生協職員食堂の現場、地域福祉事業にとりくむ「きょうとケアワーカーほんわか」、そして今回新しく仕事の始まった京都第2中央病院現場の3つで成り立っている。

それぞれの現場に、貴重なそれぞれの歴史がある。

1993年、京都生協の共同購入商品の配送業務（ネットワークレディ）の委託を受けて京都事業所は始まった。トラックを運転して生協組合員に商品を届け、組合員と直接結びつく重要な仕事で、「生活感覚」を生かしてと

いう期待から委託された。地元の主婦を中心に約80名のネットワークレディが4つの支所で働いていた。

生活感覚を生かした生協組合員とのコミュニケーションや新班づくり、組合員拡大など、労協のネットワークレディの仕事ぶりや意欲の高さには、生協や生協組合員からも大きな信頼が寄せられていた。

だが、1995年、そのネットワークレディの仕事から撤退せざるをえなくなった。

組合員の働く場を自分たち自身で創り出そうと、京都事業所の仕事おこしの模索がその年の4月から始まっていた。

事業所の中で、どんな仕事をおこしていくのか話し合う日々が続いた。配食、ヘルパー、洗車、ハウスクリーニング…。それぞれに担当を決めて準備をし、事業所の再生計画をつくって取り組んだ。

しかし、思うようにはすすまない。事業としてはなかなか成り立たない。生活の糧を得なければならない現実と仕事おこしへの確信が持てない日々。事業所全体が何度も何度も揺れ動いていた。

1995年12月、契約が終了すると、ネットワークレディの仕事を続けていく人は生協嘱託として生協に移行、登録組合員は激減した。

労協のネットワークレディとして働いていた中村恵子さん（現京都事業所副所長）は当時をふりかえって言う。「あんな思いはもういやや。センター事業団に何人残るのか、生協嘱託に誰がなるのかと、それまで仲良くしてたのに敵・味方みたいにわれてく。人間関係がぐちゃぐちゃになって…。でも、労協は好きやけど、生活があるから生協嘱託として残る道を選ばざるを得なかった人もたくさんいるんや」。

その苦闘を乗り越えて生まれたのが、「京都生協食堂現場」と「きょうとケアワーカーほんわか」だった。

生協と交渉を重ねて、1996年4月から新たに食堂業務が委託されることが決定。同時に、センター事業団としてははじめて3級ヘルパー講座を開講し、その修了生が「ほんわか」を誕生させた。その修了生の中に、今、「ほんわか」でケアワーカーとして働く内藤明子さんや大西玖美子さんがいた。

## わたしら京都事業所の責任や

今年2月、京都第2中央病院の清掃業務委託が決定した。が、人の募集は思うようにすすまない。そんな時、この「きょうとケアワーカーほんわか」と食堂現場の組合員から清掃の応援に入ろうと言う声が出されたのだった。

関西事業本部の折居事務局長は「立ち上げの人が足りなくなりそうだ」という話を聞いて、自発的に清掃改革会議にきてくれたんです。自分たちの方から『新清掃ってどんなんや？ 私たちも覚えたい』って言ってくれはって。そのあと新人研修にも来てくれはったんです」という。

「人が足りないって聞いて。でも仕事はや

りきらなね。誰の責任って言われたら、それは『わたしら京都事業所の責任』やし。各現場の組合員たちとも応援を出そうと話してきてたんです」と内藤さん、中村副所長、食堂現場責任者の森川結美さんは声をそろえる。

食堂とほんわかの組合員5人が交代で、6月15日まで毎日応援に入った。京都第2中央病院から2～3分の所にある「あすかい診療所」の清掃は応援部隊だけでやりあげた。朝7時30分には診療所の清掃に入り、2時間ほどの仕事が終わると、食堂やケアの現場にもどる。それまでは各現場の組合員が協力して、空いた穴をフォローした。



京都第2中央病院の現場で

## 雑巾の贈物

5月初旬、京都第2中央病院現場にたくさんの贈物が届いた。毎週「ほんわか」でひらいているサロンの利用者がおしゃべりしながら、縫ってくれた雑巾が数十枚。タオルも利用者が持ち寄ってくれた。

「あれはホンマに助かったね。」（吉谷幸子



たんや」(中村さん)

しかし、そうなるまでに、何度もぶつかり、議論をしたようだ。

「内藤さんに食堂に応援にって言ったら、『そんな仕事をやるために来たんと違う』って言わはんねん。でも、『京都事業所の組合員として考えてほしいんや』って、泣かすほど議論したな」と中村さんは言う。

内藤さんは「やろうと思ってきた仕事でないことに違和感はあったけど、食堂の仕事が嫌だったんじゃないんです。仕事おこしというのは何もなくて何かを生みだしていくこと。だから委託の仕事と違って、事務所で電話をしたり書類をつくったり地域をまわったりとかのすぐ目に見える成果を生まない仕事も、仕事おこしの立ち上げの時期にはやらなあかんということはどうしても分かってほしかったんです」と当時をふりかえる。「でも、食堂がお金を安定的に生み出してくれているからこそ、ほんわかはずっと支えられているとも思ってる。だから、食堂や清掃に応援にいくだけでなく、できることで支え合っていくのは当たり前やとも思っている」。

逆に、「ほんわか」のケアワーカーがそう思ってくれているということも、他の現場の人にも分かってほしいし、人が支えあっていくということが当たり前という関係をつくっていきたくと中村さんは言う。

## 現場で労協をつくること

一方、こんなこともあった。

一年ほど前、森川さんが食堂の現場責任者になって間もないころのこと。食堂の人がいっぺんに何人も辞めてしまって、森川さんが中村さんにSOSしてきたことがあった。

しかし、中村さんは「食堂のみんなはどう

思ってるの」と、その要請を押し戻した。

「現場責任者になったばかりのことで、何とかしてって組合員からつめよられて。自分もちゃんとできてないなという気持ちもあったし、責任者としてはみんながつぶれたらかなわんなと思っていた」と森川さん。きーとなつて、森川さんと中村さんは何度も激しいやりとりをくりかえした。

「それでも」と内藤さんは続ける。

「本当は人が足りひんのは、森川ちゃん一人の責任と違うよね。突っ返したのは、現場で考えなあかんことがあるから。まず、どうしたらいいかみんなで話し合っただけです。『ほんわかに応援を頼もう』ということになればいつでも応援に行く。でも、困った時、「ほんわか」と「食堂」が助け合う関係にならなければ、頼める人だけに個人的に頼むことになってしまう。そうなったら、あたかもうまく回っているかのように見えても、現場はどんどん弱くなっていくと思うんです」。

それを聞いていた森川さんも言う。

「確かに昨年と比べたらだいぶ変わってきました。『誰かが解決してくれる。それを考えるのは責任者だ』という雰囲気から、自分たちがやれるところからやろうとって、役割分担もしています」。



京都第2中央病院控室



らこうなるんやということも考えつつ、経営者でもあってケアするケアワーカー、考えるケアワーカーでなければと。高い技術を持っているだけでなく、『働き方』が自立したものでないとこの仕事はなりたたへん。『自分の頭で考えて、自分の意見が持て、それが集団的にも話し合える働き方』でないと」。

これはケアワーカーの働き方だけに限らない。「清掃でも、一人で管理清掃の現場に行っただけで床の状態を見て、その日の仕事を自分で判断できる判断力と技術を持った組合員になることが必要。それは『自立した働き方』と『話し合いができる運営』がなければ実現できない」（折居事務局長）だろう。食堂の現場でも同様だ。

## できる人に助けてもらうことも

ところで、取材の中でとても聞いてみたくなったことがあった。

激しくぶつかり合った話がたびたび出てくるし、どなり合いやケンカになることもしばしばのようだ。そんな時は、「ほんわか」は住宅地の中にある民家なので、ご近所の方が心配しないように家中の窓を閉めるほどだと言う。

「話し合うこと」は簡単なようで、実はなかなか大変なこと。それほど激しくやりあっても、お互いの話はちゃんと聞かし、それで信頼関係が壊れている様子も見えない。なぜそうならないのだろうと聞いてみた。

「会議をしても、たいてい私と内藤さんから正反対の2通りの意見が出る。それで意見をたたかわせるけど、みんなは結構それを冷静に聞いていて、自分たちなりの判断をしはる。だから、2つの意見があるのはみんなにとってもいいことなのかもしれへんな。もの



京都ケアワーカーほんわか

すごいやりあいをした後、気になって眠れないこともあるけど、やりっぱなしではいかんやん。次の日『昨日は中途半端に終わったけど、それであなたはどう思ったの』と聞き直すこともある。そういうふうにして私は関係をつくっていきたい。仕事だけの関係じゃなく、とことん付き合っていきたいと思うから」。(中村さん)

「向かってる方向が同じじゃったら、ぶつかってもいいと違うかな。人間って、自分の得意なところと不得意なところをお互いに補い合ってるはずやと思う。いろんな人を相手にするから、どんなケースでも完璧にこなせるケアワーカーなんていないし、それでいいと思う。成長しなくても良いということではなくて。ケアワーカーだって、いつもいつもいい顔ばかりできへん。利用者さんに腹を立てて事務所にきて、『うっとうしいわ〜、あのおばあさん』ってせんど言うて、気持ちを切り替えることができるんです。そうやってワガママな人にも、また向き合っていける。そういう話し相手に、中村さんはもってこいなんです。『腹立つわー』って怒る人に、『せやせや！！ホンマや！』って、その人以上に怒ってくれはるから。ケアワーカーだって自分の中で消化できない気持ちってあると思う。頭ばかりで「そんなこと言うたらあ

